

★ 鵜飼南自治会 ★



鵜飼南自治会の活動状況

鵜飼南自治会（会長 吉田清寿）は、昭和 52 年 7 月に発足以来 34 年の歴史を歩んできました。盛岡市に隣接しており、人口増加が著しい地域です。現在は、約 1,200 世帯あり、大緩、笹森、石留、諸葛川 4 地区で構成されており、平成 8 年当時からは 400 世帯の増加となっています。

東北高速道が地域の中央を南北に走っており地区は東西に分岐されます。住民の世帯の比率において 70%は 1 戸建、アパートは約 30%を占めています。

自治会の活動は、年度当初に行われる定期総会で承認され各事業が始まります。その主な内容は、新年会、夏祭り、敬老会、運動会、文化祭、春秋一斉清掃などで毎回 100 人以上を超える規模で開催しています。このほか「いきいきサロン」の支援、卓球、カラオケ、ゲートボール、婦人部などの各種行事が行われています。特にゲートボールは、各種大会で毎年上位入賞を果たしています。活動拠点となるのは、平成 15 年に新築された鵜飼地区コミュニティセンターです。村の委託を受け自治会で管理しており、利用者は、近隣の市町村を含め年間 4,000 人以上の利用があります。自治会のモットーは「会員の親睦を大切に皆で広げる和・輪・話」であり住民全員参加が基本となります。周知広報の手段は年 6 回全戸配付する自治会報、回覧ですが、最近は 3 カ所に設置されている防災無線を活用しています。このように連絡した後、各地区の副会長、部長、班長が中心となって諸活動を展開しております。内容は地域の融和触れあいと生活衛生の向上、住民の安心安全の醸成、防犯、交通安全の啓蒙活動、除雪、健康診断、各種募金活動などです。また、この地で誕生して成長し旅たつ子供達に思い出となる活動を企画しています。その主役は、地域に住む一人一人ですが、準備・計画の基幹は、自治会の役員をはじめとして会長から推薦された各委員です。経済情勢、震災等で厳しい時代環境ですが、各役員は、負けずに多忙な時間、休日の貴重な時間を惜しんで、楽しい自治会活動をしています。

東日本大震災を受けての対応状況

3月に発災した大震災では、自治会地域の財産に被害は無く、唯一被災地の家族を介護しに出かけ方、被災後のボランティア作業でウィルスに感染した2名が亡くなりました。また、生活面においては、燃料不足による通勤、暖房の確保、食料品の不足や停電による不便など日常生活に被災を受けた。

今回の発生時、直ちにコミュニティセンターにおいて、高齢者一人暮らし、停電により炊飯のできない住民のため炊き出しを行った。このような状況下に於いて、各家庭から456,958円、総会費用の一部を義捐金として贈った。この地震は今までに経験のしたことが無く想定を越えた揺れを全員が身をもって体験し「自主防災」の準備の重要・必要性を再認識した。自治会としても今後取り組むべき事項を役員で確認した。

1 自治会自主防災規約の具体的実行（検証）

平成17年に自治会防災組織を立上げているが、これに基づく周知、訓練、応急的対策の具体化が未実施であるので、やれる内容から軽易に実行する。また、規約を各家庭に回覧し意見を取り上げて住民の参画意識を高揚し内容を整備していきたい。

2 コミュニティセンターの機能充実

耐震構造で新築されている鶴飼地区コミュニティセンターに情報収集用のテレビ、ラジオが設備されていないので、村に要望し設置したい。調理器具、ガス設備はあるも発電機（PC、携帯充電機能付）をはじめ防災資機材を逐次整備するとともに、軽易な運搬機材、スコップ、かけや、担架、土のう、毛布、シート等は早急に備え付けを実施したい。

3 資材庫の準備

災害時の緊急必要品の保管には倉庫が必要である。各世帯の準備を推進するも自治会としては、100人程度の緊急に必要とする毛布、担架等を保管する倉庫を設置し、防災の資材等を逐次保管していきたい。又 発電機、照明装置、簡易トイレ等の中型資機材の取得については、計画的に村に要望する。

4 意識の改革

当地域は、県庁・村役場・消防、警察、自衛隊の緊急防災機関に近く恵まれた地域です。しかし災害時の救命救急処置は、1時間以内は自ら又は隣近所で行う処置が大切（原則）であることを啓蒙するため適時に訓練（机上、実働）を実施するとともに地域住民を行政、各種機関の講習等に参加させていきたい。



チャグチャグ馬コまつり

運動会